

令和元年9月定例教育委員会

開催日時 令和元年9月11日(水)
午前10時～午後0時

1 開会

○山本教育長

ただいまから令和元年9月定例教育委員会を開会します。よろしくお願いいたします。

2 日程説明

○山本教育長

それでは最初に、教育総務課長から本日の日程説明をお願いします。

○片山教育総務課長

本日は、議案2件と報告事項9件で、合計11件となります。ご審議をお願いします。

3 一般報告

○山本教育長

それでは一般報告をさせていただきます。夏休みも明けまして、学校がスタートしたところです。学校祭、運動会のシーズンでもあり、まだまだ暑い中、熱中症には十分気をつけながら取り組んでいるところです。また、就職がいよいよ本格化しておりまして、学校推薦が9月5日から始まり、そしてまた16日からは、いよいよ企業の採用選考が始まるという状況です。相変わらず求人はよい状況ということですので、マッチングをうまくして離職にならないようなことでもありますとか、本人の希望等に沿った指導等を行っていくことが必要かと思っております。

また、この夏休み明けというのは、体もですが、自死を始め心の変調も含めて、そういうことが来しやすい時期でもあります。子どもたちの変化を見逃さない、そうしたことが必要だろうと思っております。そうしたことについて、学校現場に注意喚起を行っておりますし、また、子どもたちがSOSを出せるような相談窓口に、こうしたことを載せたクリアファイルを配布するというので、子どもたちにも「こういう窓口がありますよ」ということを周知しているところです。

8月9日には、県として、あるいは地方6団体として、国への要望ということで、令和2年度の国の予算、あるいは制度改正にかかる要望活動を行ったところです。通学路における子どもの安全対策でありますとか、教員の働き方改革に向けた支援、あるいはトイレの洋式化など学校整備の促進等にかかる十分な予算の確保でありますとか、少人数学級、あるいは特別な支援を要する児童生徒にチームで対応できるような、そうした教員の定数でありますとか、専門職員の配置の充実等について、これは知事にも文部科学省のところにも行っていただきましたし、要望活動を行ったところです。こうしたことも踏まえたところで、先般国の概算要求が取りまとめになったところで、今の概要については別途資料を配布させていただいておりますので、また読まれて、こういうことを検討して、こうい

うものを予算を活用して取組んだらいいのではないかというご提言等いただければと思っております。

8月22日には、中国5県の町村の教育長研究大会が鳥取県日吉津村で開催されました。初めて村で開催されたということでした。5県の町村の教育長方が、お一人だけどうしても都合がつかずにご欠席されましたが、あとは全員出席されまして、当面の課題であります学校の働き方改革や児童虐待への教育の対応、あるいは関係機関との連携、また少子化に向けて教育としてどう取組んでいくのか、といったことについて、活発な意見交換が行われたところです。県からも関係課長が出席して、指導あるいは助言に当たりました。これもあまりないことだそうで、他県の教育長方からは、「県との関係が随分近いのだな」ということで羨ましいというご感想もあったようです。そうした近い関係等を十分に活かして、これから色々な本県の課題解決に取り組んでいきたいと思っております。

8月28日には首長の県内の、県と市町村の行政懇談会が行われまして、この度、知事部局の組織改正があったことから、新時代における子育て支援、人材育成の在り方ということも、一つの大きな柱として議論がされました。中身としては、英語教育やふるさとキャリア教育について、我々も説明させていただき、それぞれの市町村の取組や、意見等をいただいたところです。色々なやり取りをしましたが、「中学校卒業までは町村でもしっかりと子どもの情報について持っているんだけど、高校に入った途端に一旦切れる。その後、高校を中退するというような事態が起きたときに、町村が十分フォローできない。元となる情報がないので、そういった情報があれば、市町村もアクセスして、ひきこもりにつながらないよう、次の進学や転学、就職につなげていくアクションを起こしたいのだが、その情報がない。」というご意見もありました。そのシステムが何とかできないかというお話もありまして、こうしたことについて事務局とも連携し、また、個人情報一つの壁もありますので、そうしたところをどうクリアしながら、行政でしっかりと成人に至るところまでは、情報をどこかで集約しながら、その情報を活かしてアクセスしていくようなシステム作りについて、取り組んでいけないかなということは今、考えております。

8月31日から9月8日まで、長丁場になりましたが、教員採用試験の二次試験を行ったところです。また後ほど時間があれば少し触れることがあろうかと思いますが、やはり県外受験で欠席が多くありました。ただその欠席を勘案したとしても、これまで以上に県外からの受験者がまだ残っているということで、現段階ではそれなりの成果があったのではないかと感じているところです。私からは、以上です。

4 議事

○山本教育長

続いて、議事に入ります。本日の議事録署名委員は、鱸委員と佐藤委員にお願いします。まず、森田次長から議案の概要説明をお願いします。

○森田次長

議案第1号、鳥取県特別支援教育推進委員会の就学支援分科会の委員の任命についてです。これは、9月で委員の任期が満了しますので改選を行うものです。

議案第2号に関しては、教育委員会事務局職員の任免発令規程の一部改正についてです。これは、法律の改正に伴い、その引用する用語の削除等を行うものです。よろしくお願ひします。

○山本教育長

それでは、議案第1号についてですが、人事に関する案件ですので、非公開で行うこととしたいと思いますが、よろしいでしょうか。(同意の声)

それでは、非公開で行うこととします。

【議案第1号】鳥取県特別支援教育推進委員会就学支援分科会委員の任命について(非公開)

【議案第2号】教育委員会事務局職員の任免発令規程の一部改正について(公開)

○片山教育総務課長

新旧対象表を付けておりますが、辞令書ですとか、人事異動通知書などにあります「日本工業規格」という言葉が、「日本産業規格」という言葉に変わるということが法改正されました。今の時代ですので、今後、電子化等も含めて、紙の大きさまでいちいち書かなくてもいいだろうということで、この法律の改正を機にこの注意書きを取ってしまおうということです。併せて3号様式の下にある履歴書・給与原簿等の照合欄、こういったものも今、電子データで行う時代ですので、あまり意味をなさないということで、この欄も取ってしまおうという改正をこの度お伺ひするものです。

○山本教育長

ご質問、ご意見ございますか。よろしいでしょうか。(同意の声)

それでは、議案第2号について、原案のとおり決定したいと思います。

5 報告事項

○山本教育長

続いて報告事項に移ります。始めに事務局から順次、説明し、その後、各委員から質疑をお願ひしたいと思ひます。

まず、報告事項アは欠番です。報告事項イからオについて、説明してください。

【報告事項イ】第1回山陰教師サポート連携協議会(S×T協議会)の概要について

○小林参事監兼教育センター所長

8月27日に、第一回協議会を開催しました。位置付けとしては、8月定例教育委員会でお話しましたが、協議会の立ち上げについてということでご報告しておりましたが、その第一回のキックオフの会を開催したということです。

三番目に出席者と書いてありますがけれども、島根大学及び島根大学大学院から、センター長をはじめ11名をお招きして、県教育委員会側からは教育人材開発課、小中学校課及

び、東中西部の3教育局の局長、そして教育センターを含めて14名の出席ということで、会議を開催しました。

当日の内容については、大きく二つの柱がございました。一つは、初任者の人材育成に向けてということで、これは協議になりました。そしてもう一つは、これまでの連携事業の報告と今後の方向性ということで、広く意見交換をしたところです。当日出ました主な意見、提言等については、何点か書いておりますが、とにかくよい教員を育てるということで連携協力してやっていきたいという話や、そうは言っても日常の様子、これをしっかりと捉えて支援していかなければいけないという話が出ました。同時に学校における中堅教員や管理職、こちらについても、指導していけたらなという話も出てきました。そういった中で日常的に、各東中西部の教育局が学校訪問等しておりますが、その辺りと教育センターの強みを活かした訪問、学校に係るといった棲み分けをきちっとやらなければいけないというような課題を確認したところです。

その他、地域の教育力向上プログラムの取組について、西部から説明があったり、現職教員研修プログラムの取組について、島根大学から今後の方向性についての話があったところです。この現職教員の研修について、毎年鳥取県から10名の教員を派遣していますが、その中身の今後の方向性についての意見もあったということです。

今回のキックオフの会を踏まえまして、今後、11月に鳥取県教育委員会と島根大学との二者協議の場が設定される予定ですので、その場において今回の報告や、今後の具体的なアクション、学校に入ってどんな支援ができるのかという提案ができればと考えているところです。また、この日の協議会については、次の日の日本海新聞朝刊に記事を発表していただきました。以上です。

【報告事項ウ】 令和2年度に使用する小学校教科用図書及び中学校教科用図書（特別の教科 道徳を除く）の採択について

○中田参事監兼小中学校課長

資料の一枚目が小学校、裏面が中学校のものです。小学校は、令和2年度から5年度までの4年間使用するというもので、中学校は令和2年度に新学習指導要領実施となりますので令和2年度の一年間だけ使用するということになります。中学校から先に言いますと、後一年ですので中学校は変更はございませんでした。

小学校は、新しい学習指導要領の元での教科書ということで、若干これまで使っているものと変更がございました。まず変更があったのが国語です。国語の東部と中部はこれまで東京書籍を使っておりましたが、光村図書出版に変更になりました。社会でいいますと、中部の地図帳ですが、東京書籍から帝国書院に変わりました。理科は、中部ですが東京書籍から啓林館に変わりました。生活科の東部と中部ですが、東部は大日本図書から東京書籍へ、中部は啓林館から東京書籍へそれぞれ変わりました。家庭科の東部は、開隆堂出版から東京書籍へ変わりました。外国語については、本年度が初めての採択になりますが、東京書籍になっております。特別の教科道徳も30年から使っているわけですが、西部のものが東京書籍から光村図書出版に変わっております。

以上、8月31日を期限に、東中西部のそれぞれから県教育委員会に報告されています。

【報告事項エ】鳥取県と楽天株式会社との包括提携に関する協定に係る取組の概要について

○酒井高等学校課長

二つございまして、一つは「IT School NEXT」という取組。もう一つが「Rakuten Super English」の活用です。ご存じのように、鳥取県と楽天は4月に包括連携協定を結び、楽天の強みであるデジタルを使った、例えばキャッシュレス化の促進ですとか、あるいはビッグデータを活用した観光のプロモートとか、様々な取組を鳥取県と行うわけですが、その中に「県内の次世代人材の育成」がございまして、それに基づくものです。

まず、楽天「IT School NEXT」から説明します。これは、楽天の若手社員が、今回は岩美高校に入っただき、岩美高校の生徒とともに、地域の人も巻き込んで地域課題の解決に取り組んでいくことを、現在行っているところです。具体的には、8月9日から11日まで3日間、合宿形式で楽天の社員5名が岩美高校に行き、岩美高校の生徒に対して「2030年のサステナブルな漁業」という大きなテーマで、岩美町の地元漁師の方や、漁協の方を学校に招いて、インタビューし、生徒同士のディスカッション、そして、プレゼンという形で、2030年にどうやったら漁業が継続的にできるかということ、生徒は色々アイデアを出して話し合いました。3つのグループで行い、11月に校内発表を経て、一番優秀な1グループが、12月に楽天本社になると思いますが、東京で行われる成果発表会に参加することを予定しております。

イングリッシュの方ですが、これは、楽天が今、開発途中の英単語の学習ツールの実験といたしまして、ここに協力をしているのは境高校の生徒です。74名の生徒が、この楽天イングリッシュを使って、「こういう面が非常にいい」とか、あるいは足りないとかということ、楽天と一緒に考えていくというものです。最初7月にこの会を起しましたが、そのときに楽天の担当から、「グローバル社会における実用英語の重要性」について講演を行っていただきました。ご存じのように楽天自体、公用語が英語になっていまして、会社の方と話をしても、ダイバーシティ・多様性ということ、盛んに言われて、社内自体も別に英語にすることが目的でもなんでもないようであり、多様な人材が色々な発想をするということ、重要視しておられるようです。現在、境高校の生徒の活用状況ですが、なかなかよろしくございません。楽天の単語帳は、スマホのアプリからどんどん出てきますので、正解すると次の単語が出てきて、また正解すると、そうするとポイントのような何かもらえたり、そういうようなことで行っていますが、やはり生徒には、しばらく使用していないと楽天から激励のメッセージが届いたりすると、もっと生徒は活用するのではないかと今、楽天と話しているところです。以上です。

【報告事項オ】米国スタンフォード大学における平成30年度グローバルリーダーズキャンパス最優秀受講者表彰式について

○酒井高等学校課長

このグローバルリーダーズキャンパス、昨年度スタンフォード大学から、今年度特に

優秀な成績を収めた生徒ということで、鳥取西高の小谷さんと青翔開智高の池井さん、この2名をスタンフォード大学に招待して、スタンフォード大学で表彰式を行うということで、2名と英語教育推進室長が行って参りました。鳥取西高の小谷さんは、1年時にSGH（スパークグローバルハイスクール）の事業でオーストラリアのアデレード大学で研修を受けた生徒です。青翔開智高の池井さんは、これも1年時に、これは学校独自で行われています語学研修でオーストラリアに行った生徒です。池井さんは今年度のグローバルリーダーズキャンパスの開校式で、経験を発表していただいたりもしております。

内容としましては、表彰式ですが、その間にグローバルリーダーズキャンパスのプログラムにありました自然環境保全をテーマにしたディスカッションをした時のアメリカの高校生が通っています Nueva 高校というところにも行きまして、その生徒とも交流したということで、出席者は、この事業を行っていただいていますゲイリー・ムカイ先生、そして、ヨナス・エドマン先生、更には鳥取県と関わりの深い本間先生をはじめ、サンフランシスコの日本領事館ですとか、そういったところからも来ていただきました。

一番下がムカイ先生の表彰後のコメントです。「このプログラム、スタンフォード大学が行っている国際異文化理解教育、これをやってきた中で、最も誇りに思い、最も忘れたい一日だった」と、かなり高い評価を聞くことができました。

成果についてを2ページ目に書いておりますが、人口が一番少ない鳥取県からも、世界とつながって世界で学ぶことができるということが、生徒の誇りにもつながりますし、今後も進めていきたいと考えております。

実は昨年度は、この事業、生徒25名を想定していたのですが15名しか申込がございませんでした。ただ、今年度は40名申込がありまして、選考を経て、スタンフォード大学とやり取りをして、よりたくさんのお受入をお願いして、25より少しでも多くということで、何とか30名までは受講できるということで、今年度は30名参加しております。

○山本教育長

それでは、ご質問等があれば順次お願いします。まず、山陰教師サポート連携協議会は、いかがですか。

○中島委員

大変素晴らしいことではないかと思えます。少し具体的にお聞きしたいのが、主な意見、提言のところの「地域の教育力向上プログラムの取組」というところで、これは結構、遠大な取組みだと思うのですが、例えば、どのようなアプローチが考えられるものですか。

○小林参事監教育センター所長

ご存じのとおり、西部は地理的にも島根大学と近いということがあって、日常的に島根大学とやり取りをしています。そういった中で当日報告にあったのは、一つは、例えば各学校における外国語教育の支援に島根大学の先生に入らせていただいているということ、いくつかの学校で日常的にしておられるというような報告がありました。

それからもう一つは、学力向上、算数・数学ということで、これもやはり、米子市と境

港市のいくつかの学校が、島根大学の先生方に学校に入っただいて、具体的な指導を受けているということと、もう一つは「Cha×3プログラム（チャチャチャプログラム）」というもので、学生が入って地域のコミュニティ、異年齢の方の話合いに学生が協力しているという、そういった総合的な報告があったというのが当日の中身です。

○中島委員

何となく地域の教育力というと、保護者や地域の方たちを巻き込んだという感じがするんですけども、そういうことではないのですか。

○小林参事監兼教育センター所長

そうですね。我々視点で書いているので、教育関係のという我々の捉えでの言葉です。

○中島委員

例の学力学習状況調査等でも、やはり何か曖昧な言葉だけでも、「地域の教育力」というのはあるのかなという課題意識があるではないですか。そういうことを例えば、どういう形がいいか分からないですが、保護者の方や公民館活動等と関わりながら、何かしらしていくみたいなことかなと思ったんですけど、それはそうじゃないということなんですね。

○小林参事監兼教育センター所長

委員がおっしゃるように、本当は、もっと網の目のように広がって、つながってというのができるとすごくいいと思いますが、今は少しワンポイント的といいますか、いくつかの点がどうにかつながろうとしているといいますか、そういう状況だと思います。

○中島委員

もし、流れの中で、そういった学校以外の場所も巻き込んでということが、もしできるのであれば、学校以外の方も関わっていただければ何かができるというような切り口がもしありそうだったら、ぜひ試していただけるとありがたいと思います。

○小林参事監兼教育センター所長

おっしゃるとおりだと思います。ですから、そういったように点が横に広がることと、年齢層が縦に広がってつながる、そういったことが総合的にできるといいなと思います。

○中島委員

少し余談ですが、大山町中山で、ご年配の方、百人以上に少しお話をする機会がありましたが、ご年配の方はやはり教育の話はものすごく興味をお持ちなんですね。何かしらそういうところで話をして、それが家庭に入りたいなこと等、意外と意味があるのかなと思ったりします。じわじわのことではあると思うんですけど、ぜひご検討いただきたい。

○小林参事監兼教育センター所長

そういった視点も持っていきたいです。

○佐伯委員

私も資料を読んでいて、本当に普段どおりの日常の様子を見ていただくのはいいなと思います。計画訪問等になると構えてしまって、事前にすごく準備して、その授業だけはどうまくいくかもしれないけれども、それ以外の普段の授業がきちっと成立するということが第一です。その細かなところをどのように自分の学年団や中堅の教務の先生等に相談するか、あるいは入っていただくようなことが、本当は各学校現場が自然にできていればそれでいいのですが、今は色々なことに追われていて、自分のクラス等のことばかりになってしまい「隣のクラスの先生は実は困っているんじゃないかな」ということは雰囲気としては分かっているが、一步踏み出せないということもあるのではないかと思います。

ですので、資料にあるミドル教員や管理職への意識付けや、校内体制の整備等、その辺りも訪問時に「こんなふうにサポートしてもらいたい」とか、具体的な動き等も言っただくと、「そうか、そんなふうに入り込んで一緒にやっつけていけばいいんだ」と気づいたり、案外、分かっているようで分かっていないことがあると思うんです。その辺りも、新しい先生だけでなく、中堅の方や管理職にも広げていっていただくと嬉しいです。

○小林参事監兼教育センター所長

教育局ともその辺りは、下話というか、棲み分けの部分も含めてしっかり話をした上で、また、センターはセンターの角度からの学校へのアドバイスみたいな指導ができればと思っております。今回、島根大学と一緒に入っていこうと思っているのは、島根大学も学生を教えて、卒業させて、採用になって「はい、終わり」ではなくて、実際に卒業した学生が教員として教壇に立った時に、日々子どもとどう向き合っているのかを、実際教授の皆さんにも見ていただくことに意味があると思っていますので、それが大学の4年間のプログラムにフィードバックされるという、そういったちょっと中長期的な部分も持っております。委員のおっしゃるポイントについても、意識して学校に関われたらと思います。

○山本教育長

その他、いかがでしょうか。よろしければ次の項目に進みます。

○中島委員

テクニカルな質問なのですが、これは東部・中部・西部と別れて教科書を決めますが、この東部・中部・西部に分けるということは、これは何によって東中西部というグループ分けになっているのですか。慣例でしょうか。

○中田参事監兼小中学校課長

採択制度を本県でつくった時に、このようなやり方をしているものだと思います。

最終的には市町村が採択ということになりますが、そうは言ってもということで、東中西部の塊で調査員等を出しながら採択していくということはずっと行ってはおります。

○中島委員

教科書は今時、「教科書を教える」ではなくて、「教科書で教える」だからいいのかなとは思いますが、教育のより民主化等を考えた時に、市町村単位で決めるという考え方も、考え方としてあるのでないかなと思います。ただ、その辺りもちろん現場の先生の仕事が増える等の問題もあるのかなと思いつつ、本質論としてどうなのかなということのを少し思ったものですから、お聞きしました。

○中田参事監兼小中学校課長

最終的に権限は、市町村教育委員会にあります。それぞれがやっているというよりは、各圏域で集まって話を出し合っているという形をとって進めております。

○中島委員

分かりました。

○鱸委員

今の件ですが、私も同じようなことを考えておまして、国語と数学と英語というのは評価される科目なので、小学校と中学校の場合では考え方が違うのかもしれませんが、やはり標準化ということの一つを考えておく必要がある。ただ、結局は教え方だろうと思うのですが、教科書が違うことによって、教える流れやリズムが変わるようであれば、試験の結果を考えた時、鳥取県全体の成績を上げたいと思うと、ある程度、標準化された教育ということも頭に入れておく必要があるのかもしれませんが。独自の先生のよさというのは当然なのですが、そういうところに教科書の標準化も一つ、言われましたように県から調整していくという、ある程度「こういう形でやりたいよね」というような共通認識というか、いわゆる組織化していくということも大事だと思います。

○中田参事監兼小中学校課長

そういった部分も難しいところはあるんですけど、学力の問題になってきますので、使用する教科書が違うことによって、それぞれの地域の差が出るというのは好ましくないと思います。ただ、それを解消するために、やはり授業改善の視点を県としてきちんと、各学校・各教員方に届くような方策というのが大事になってくるんじゃないかなと思います。今、学力向上に向けて取り組んでいるのも、そこが基本ですのでそういうところを頑張っていきたいと思います。

○佐伯委員

道徳が特別な教科として、東・中・西部が全部違うところを決めてきたというところがすごいと思っています。一生懸命やろうとする先生は色々な資料を読み込んだりされるので、「自分としては、例えば西部で光村図書だけでも、ちょっと今回は中部のほうのところから取ってきたいな」とか、そんなことはされると思うんですけども、でもそれぞれの東・中・西部の方に中盤辺りに「使ってみてどうでしたか」ということは、ちょっと聞いてみたいなと思いますね。

○中田参事監兼小中学校課長

ご承知のとおり、鳥取県小学校教育研究会等、教員皆で情報交換をします。教科書が変わると、中身も教材も変わってきますので、その辺り学校の先生方もとても大変な一年になるのかなと思います。

○佐伯委員

前はずっと光村図書でしたが、東京書籍に変わっていて、また光村に帰ってきたなど。

○中田参事監兼小中学校課長

光村は懐かしい教材があるものですから。ただ、そこで陥りやすいのが、例えば、物語だと、すごく思い出のある物語がたくさん載っていますので、言うなれば学習中に心情をすごく追い求めていくような授業があって、ただ活動があって学びなしてみたいなことにならないように気をつけることも必要です。学力学習状況調査の問題も、学習したことをどんなふうにして活かしていくかということが求められているところですので、そういった部分について変な誤解が生じないような、その手立てというのは注意していかないといいと思います。

○鱸委員

基本的なことを少し聞きますが、小学校2年生から5年生に使用する教科用図書というのは、その間は変わらないということになると、例えば、兄の教科書を弟が使うということも当然できるのでしょうか。無償で渡されるけれども、ただちょっと参考になるようなことを書いているとか、それと兄の学んだことというのは、兄弟同士では少し愛着がある。私自身の感覚からすると、昔は、兄が使った本を使うのがすごく嬉しかったとか、書いている跡を見ると、「こんな勉強したんだな」と。だから必ず、わざわざ兄の本をみるような、そういった子どもが存在すると思うんです。そういうのもいいかなと思います。ただ、何年度で変えていいという令和2年度から5年度というのは、それは次の時代に沿ったものに改訂して、その小学校がまとめて使うという理解でよろしいですかね。

○若原委員

先ほど、小学校の教科書を新しく変更されたのは東部・中部が多かったように思いました。西部が少なかったというのは、それについての考えは何かあるのでしょうか、意欲に差があるとかいうことではないですね。

○中田参事監兼小中学校課長

そういうことはありません。

○若原委員

十分それぞれ検討された上でということですね。

○山本教育長

その他、いかがでしょうか。報告事項ウからオはよろしいでしょうか。

○中島委員

楽天は、教育のためのツールを結構、持っておられるんですか。

○酒井高等学校課長

これから、どんどん開発していきたいということです。まずは英単語から。

○中島委員

そうですね、まずは英単語からなのですか。コンテンツ的にはベネッセやリクルートと比べてどうなのでしょう。今、私立学校等で、学びの個別化ということをやっているのではないですか。ビッグデータとかで県立高校でもどんどんやっていけばいいなと思うんですよね。分かったことは気にかけず、できなかったことばかり問題を返してくれるようなこととかは、当然だけど理に叶っているので、そうしたことの導入というのは、県立学校では考えられないものなんですか。

○酒井高等学校課長

いえ、考えられます。

○中島委員

それは、ハードルはあるのですか。

○酒井高等学校課長

ハードルというのはどういったことでしょうか。

○中島委員

費用的なこと等です。

○酒井高等学校課長

当然、費用がかかりますので、それがハードルになるかもしれませんが、まだそちらのほうに意識が向いていないのかもしれませんが。学校の中には、スタディサプリの的なものを始めようとしている所もありますので、これから広がっていくんじゃないかと思います。

○中島委員

それは学校判断なんですか。

○酒井高等学校課長

今のところは学校判断です。

○中島委員

どんどん導入していけばいいなと思いますが。

○山本教育長

推奨するという手はあるのかなと。

○足羽教育次長

機械の導入にしても予算は当然、伴いますので。私立学校等がされているのは、まさしくそれで、子どもが躓いたレベルに応じた課題が、次から次へと個別に出てくる。だから、皆が一律の課題を同じようにするのでなく、自分の学びの度合いに応じた段階で更に高まっていく。だから個別でするには理想だと思います。

○國岡教育人材開発課長

そういったアプリというのは、まだ技術的に進行段階で、本当に使えるソフトはそんなには多くないと思います。「これだったら使えそうかな」というものを取り入れている面もあって、なかなかその選択肢はまだない状態のように感じています。かなり限定されています。

○中島委員

教科による、この教科だと導入がしやすいというのはありませんか。

○國岡教育人材開発課長

比較的、この英語のようにドリル的な要素があるものは導入しやすいでしょうし、数学は本当に単純な足し算・引き算レベルだったらできるのでしょうけれども、まだそういう意味では高校で取り入れるレベルには、ソフト自体が成熟していない印象です。

○山本教育長

私立学校での導入は中学校だったりします。

○中島委員

しかし、今、高校等で課題を聞くと、要は中学校までのとか、小学校レベルのことで、わりと躓いているみたいな、分数がちゃんとできないみたいなこととか含めてあるのかなと思うと、ある程度、導入ということは現場的には意味があるのかなとも思いますがどうでしょうか。

○國岡教育人材開発課長

単純な小中学校レベルとなると、比較的選ぶ余地も出てきて取り入れていく余地はあるのかなと思います。ただ、本当に技術的に日進月歩な状態で、2年前に智頭農林で取り入れた学びの基礎的なドリルなども、取り入れたんですけども結局、使えなかったです。

○中島委員

それは簡単すぎて、ということでしょうか。

○國岡教育人材開発課長

いえ、操作が煩雑すぎて、教員の手間のほうがかかりすぎてということもあったりしました。ただ、徐々に進歩してきているなという実感はあります。それを私立学校は導入しておられるのでしょうか。

○中島委員

私立学校での導入は、楽天さんですか。

○國岡教育人材開発課長

違う会社だと思います。

○中島委員

ただ、逆に言うと、楽天さんもそうした試行錯誤の場として臨んでいる部分もあるんですよね。

○山本教育長

そう思いますね。どこまで広げていくのかですけれども。

○中島委員

現場的に色々なことがあると思いますが、ぜひ使えるところは積極的に使って試していただけるといいんじゃないかと思います。

○山本教育長

現場側から、こういったものを使ってやってみたいという話が出てくれば、それは今までも、先ほど智頭農林の話が出ていましたけれど、県もバックアップすることにしていきますので、現場の色々なところにアクセスして、色々な情報を共有のところに仕掛けて行って、使えそうだなというところに使っていけたらと思います。

○中島委員

学校の学力水準にもよると思いますが、情報交換等で、「これは使えるよ」ということで、「では、これを皆で使ってみようか」といったことがあるといいかなと思うんですね。何だか私立学校ばかりがそういったことをされているという印象があるので、「公立学校もやっているよ」というところを見せていただけると。ぜひお願いします。

○若原委員

楽天さん以外にも、こういった情報というのはありますか。

○酒井高等学校課長

単語で同じようなことをしているところが、あるかどうかまでは分かりませんが、楽天はあくまでも商品化したい。今後売っていくために、色々なデータが欲しい。そこで、「協力してもらえないか」ということですので、生徒がスマホを使って、このアプリに接続すると、何時何分どこまで行って、ここで躓いたらどこにいったということ、すべて楽天側が把握できます。

○若原委員

相手側にデータがいくわけですね。

○酒井高等学校課長

学校の担当している先生にも、この生徒の使用頻度はこうで、レベルはこうでということが、一週間ごとに入るシステムになっています。

○若原委員

さっきお聞きしながら、大分、前の話になりますけれど、キャリア教育が注目され出したころに、大学ですと、キャリア教育のノウハウがほとんどなくて、色々なコンサルタント会社から人を派遣してもらって、業者の方にキャリア教育を任せるようなことを、最初のうちは行っていたところが多かったですね。そうやって、結局、業者に丸投げみたいになってしまうと、業者の方にはプラスになるかもしれないですけども、大学の側で思うキャリア教育とはかけ離れていく。そういうことがあって、もう大学にもノウハウが大分、蓄積されてきましたので、今はそういったことはないと思いますが、やはりよく考えて、もちろんお互いにプラスになるように、慎重にやったほうがいいように思います。

○中島委員

少し細かいことですが、英語教育ということで包括していくと、確かに最後は単語なんだけれど、要は子どもにしてみると、「単語だけを覚えろと言われてもな」ということがあるじゃないですか。「これは何のために覚えているんだ」というような感じ等があって、そうすると子どもたちに、それこそ境高等学校等で、どのようにモチベーションを与えていくかということ、単語以外にも何かアプローチがないのかなと思うんですけど、その辺りどうなんでしょうかね。

○酒井高等学校課長

まさに委員がおっしゃったとおりですね。単語だけでは面白くないので、活用状況がよろしくない。それで、学校の教員もどうしたらいいかと思っています。楽天としては最初、将来、社会で使えるような英語、会社の中では英語が公用語ですので、社員の中から「こういう単語が必要だよ」と、どんどん選りすぐって行って、元々の教材を作っていますので、それが通用しないということになると、「どうしたら使ってもらえるか」ということを、いま学校と楽天さんとで、教育委員会が間に立って話し合っていて、よりよい教材になるように話をしています。

○山本教育長

使う場とか、興味関心を持たせる場とか、そういう体験がどこかで挟み込まれないと、「単語だけ覚えても、これは試験のための勉強だ」というツールになるんじゃないかなと思います。

○中島委員

子どもたちの興味から始めるしかないと思うので、例えばなんですけど「アニメの話アメリカ人とするとしたら」とか、そこで何かしら、ちょっと彼らの日常から内的なモチベーションにつながるものを用意しないと、これははっきり言って、単語だけ覚えるなんて、ネットでいくらでもありますからね。いくらでもあるじゃないですか。このツールを使う意味は、それこそフィードバックにあって、でもフィードバックは「使っていない」からできない。だから、「使ってね」という具合で、「やる気にさせてくれよ」という話だから、なかなか、正直言えば、これは少し現実的には厳しいのかなという気がするんですよね。色々と試行錯誤の中だとは思いますが。

○酒井高等学校課長

ご意見ありがとうございます。

○中島委員

スタンフォード大学から招待を受けるなんて、素晴らしいことですね。

○鱸委員

このプレゼンテーションのビデオ等ありませんか。

○中島委員

見たいですね。

○酒井高等学校課長

また、確認してみます。

○鱸委員

15分はすごいですね。その雰囲気だけでも見たいです。

○森田次長

プレゼンシートだけなら、スタンフォード大学のホームページに表彰式のプレゼンの様子や、下のほうに表彰盾を持っている、そんな感じの写真が、実はスタンフォードは日本全体に対して教育プログラムをやっていて、盾をもらう子はほとんど帰国子女で、英語がネイティブのような子たちが出て受けるんですけども、まさか短期間に鳥取県からこういった子どもが出るというのは感慨深いですね。

○佐藤委員

今年は、ぐんと増えたんですね。増えた要因は何でしょうか。

○酒井高等学校課長

やはり段々定着してきまして、一番最初多かったのが、いわゆる機器の遠隔教育ですので、いくら待っても授業が繋がらないとか、そういった評判が立ってしまった学校が何校かございます。ただ、もうまったくそんなことはありませんので、そういうところもきちんと周知できてきました。

○足羽教育次長

最初は、多くの学校からエントリーがありました。ただ中身が少し、やはりレベルが高い。話題を設定しながらディスカッションしていくとなると、ハードルが高いなという気づきがあって、少しぐっと減り、でもこのレベルに設定をもう一度し直してもらって、エントリーができるというところから、去年は少し少なめだったのですが、こういうレベルでこういうふうにできるということが周知が図られたというところが、大きいんじゃないかと思います。よりこのような生徒たちが出ることを思えば、我々も発信してそういうレベルで頑張る子どもがいるところには、どんどん積極的に活用してみてもいいというふうに発信はし続けなきゃいけないなと思っております。

○鱸委員

このキャンパスで話し合われる時、異文化の問題が出ると思うのですが、大体そういったテーマですか。

○足羽教育次長

結構、身近なものもあります。

○鱸委員

身近なものだけど、異文化が背景にあるやり取りをするわけですね。

○足羽教育次長

はい、そうですね。

○酒井高等学校課長

それが先ほどのお話で、アニメの違いですとか、身近なところから。

○若原委員

これは、招待してもらった場合、引率者の分も負担してくれたんでしょうか。

○酒井高等学校課長

はい。

○中島委員

引率者もスピーチをしたのでしょうか。

○山本教育長

向こうから、引率者は英語教育推進室長にしてくれと名指しがありました。

○中島委員

すばらしい。ぜひ動画を見たいですね。

○酒井高等学校課長

今のお話ですが、引率者がビデオカメラで撮影した映像があるということです。今すぐは手元にないので、またの機会にお願いします。

○山本教育長

その他、各委員方から何かございましたら、発言をお願いします。

○中島委員

最初の教育長の一般報告にもありましたが、夏休み明けで心配になる子供の動きはありませんでしたか。

○中田参事監兼小中学校課長

特に学校のほうから増えているという報告はありませんでした。

○山本教育長

それでは残りの報告事項については、時間の都合により説明を省略することとしたいと思います。よろしいでしょうか。(同意の声) 以上で報告事項を終わります。

次回は10月16日(水)午前10時から定例教育委員会を開催したいと思います。いかがでしょうか。(同意の声) 以上で、本日の定例教育委員会は閉会します。